

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第41号

平成29年2月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

如意輪寺を再興した鉄牛上人は長宗我部元親の6男、文親

## 楠正儀の孫、正盛 土佐に入り、楠瀬名乗る

### 文親の母は正盛の孫、正宣の娘か孫か？

#### 鉄牛上人＝文親は、楠氏末裔

如意輪寺の加島公信住職によると、衰退の一途を辿り、無住職の時代が200年以上続いたのち、江戸時代の初めのころ、如意輪寺を再興した中興の租が鉄牛上人で、長宗我部元親の六男、文親とのことです。

この長宗我部文親という人物は、長宗我部元親と楠正儀の末裔の娘との間にできた子どもで、大坂夏の陣で長宗我部元親の跡を継いだ四男の盛親が六条河原で打ち首・断絶となりますが、この時、盛親の子ども二人を連れて吉野に落ち延びたのが文親でした。

加島住職は、文親は楠氏の末裔が故に、楠氏ゆかりの吉野に向かったのではないかと考えておられます。

なぜ、楠正儀の末裔は四国、それも土佐に渡ったのでしょうか。1月の例会は、長宗我部元親と土佐に入った楠氏（楠瀬氏）について学びました。（右図：人物叢書長宗我部元親より）

#### 幕府の弾圧を受け、土佐へ

まず、楠正儀の末裔が土佐に入った背景を見ましょう。

応永6年1399、正儀の二男、正秀は大内義弘に与して足利義満と戦いますが、この時正秀の武将を務めた土佐の国安芸城主安芸元信の嫡子元康が戦死したことから、正秀の二男、元信が養子に入り、安芸家を継ぎました。

その後、足利義満の子、義教は楠一族に大弾圧を加えたため、正秀の長男、正盛は安芸家を継いだ元信を頼り、土佐の国安芸郡土居村玉作に移り住み、楠瀬を名乗り、土佐楠氏の始祖となったのです。そして、正儀の三男、

正平の子ども達も土佐の国に入り、それぞれ代を重ねるごとに、楠氏末裔は土佐全域に広がっていきました。

#### 長宗我部元親、四国を統一

長宗我部元親は天文8年1539に生まれ、永禄3年1560、22歳のとき初陣を飾り、同年国親の死去により長宗我部家を継ぎ、土佐の国統一に動きまわります。

永禄11年1568、北方の本山氏を滅亡させ、翌年には東方の安芸氏を滅ぼし、天正3年1575、渡川の合戦で西方の一条氏を破り、初陣より15年をかけて土佐一国を統一します。

その後破竹の進撃を開始し、天正7年1579、阿波に侵入、天正8年1580、讃岐に侵入、天正9年1581、伊予に侵入、天正12年1584、十河、虎丸両城の落城を経て、伊予を平定、土佐統一後10年にして元親は四国全土を傘下に収めるのです。

しかし、元親は織田信長には抵抗したものの、四国征伐の軍令を発した豊臣秀吉には苦戦を強いられ、豊臣秀長

を介して秀吉との講話に動き、天正13年1585の8月、せつかく統一した四国でしたが、土佐一国安堵で秀吉の軍門に下ります。

その後、秀吉から羽柴の姓を許されるほど重宝され、天正18年1590の小田原攻めにも参陣、文禄元年1592の朝鮮の役にも従軍します。そして、検地をおこない、22カ条の法度を定め、百カ条の掟を發布するなど、領国の経営に努め、慶長4年1599、4男の盛親に遺言を残し、



長宗我部元親画像（高知市 崇神社蔵）

伏見の邸でなくなります。享年 61 歳。

## 遠流の国、遠国、土佐

この頃、土佐の国はどのような地だったのでしょうか。四国そのものが本州から見ると遠い異国の地であった上、険しい山々の連なる四国の中でも、土佐の国に入る事は至難の業で、古の時代から落人・配流者の住む地としてその歴史を刻んできました。

即ち、土佐の国は、南海僻陬（へきすう）の土地で、遠国（おんごく）として流刑の制が古代からこの地に布かれてきました。佐渡や隠岐とともに遠流（おんる）の国として、重罪人配流の地であったのです。遠く天平の頃（729～743）に始まり、平安期に入ると、菅原道真の子や藤原頼長の子、鎌倉に入ると、源頼朝の弟、法然上人、尊良親王らが記録されています。

また土佐は、落ち武者の流れ来り、隠れ住む永住の地となした土地柄でもありました。源平の合戦より、関が原、大坂の陣に至るまで、落人や敗残の武将が逃れ来て、隠れ里として子孫を残してきた地だったのです。

源平合戦で敗れた兵士の一部は、屋島や壇ノ浦から、土佐の国安芸郡、香美郡の山奥や海辺に逃れ、その末裔は長宗我部の家臣になったとも伝えられています。

## 正宣、元親の居城近くに移住

足利幕府の徹底した弾圧を受けた楠正儀の子孫は、孫の元信が安芸氏に養子に入り安芸氏を継ぎ、元信の兄、正盛は、足利幕府の追討を逃れんがため、永享3年1431その安芸氏（弟）を頼り土佐の国安芸郡玉作に入り、土佐楠氏（楠瀬）の始祖となっています。

そして、下図「長宗我部元親・楠氏関係地図」記載の通り、土佐の国に入った楠正儀の末裔たちは、安芸郡玉作を皮切りに、その後、代を重ねるごとに、香美郡、長岡郡、土佐郡、吾川郡、高岡郡、幡多郡と土佐全域に散らばり移り住むこととなったのです。

一方、長宗我部元親は、天正3年1575、渡川の合戦を経て、土佐一国を支配下に置きます。

元親が、土佐を統一する過程で、楠氏末裔との様々な関わりがあったであろうことは、敵、味方を問わず、容易に想像できるところです。

特に、元親の全盛時代（1560～1585）に、正盛の孫、正宣は玉作から元

親の居城、岡豊城により近い香美郡香我美に移り住んでいることから、元親との間に良好な関係を築いていたことと思われます。

このように、長宗我部元親の土佐統一、四国統一の動きと、土佐楠氏の土佐全域での拡がりを重ね合せて考えてみると、元親が土佐楠氏を臣下に加え、人質として息子や娘を預かるなどの関係があったと推測できます。

とすれば、如意輪寺の加島住職の言う、長宗我部元親と楠氏末裔の娘との間にできた子が、六男の文親であるという事も頷けます。土佐楠氏（楠瀬氏）の系譜を繙いていくと、文親の母、楠瀬氏の娘は、正宣の娘か、孫辺りではないかと思われます。

## 西蓮寺に残る住職系譜

元親が、楠正儀の末裔、楠瀬氏の娘との間にもうけた子どもが文親であるとの史料に基づく確認はとれませんでした。

ただ、6男の存在や、一部、側め？との間に6男をもうけたとの記述は残っているようです。

また、吉野、西蓮寺発行の冊子「吉野路に輝く法灯西蓮寺」には、長宗我部氏系譜が掲載され、元親の子、6男の文親が文誉鉄牛を名乗り、西蓮寺を開山したこと、また、隠棲後は豊田儀右衛門を名乗り、その末裔が今日に至ると、記されています。

如意輪寺に伝わる伝承、更には西蓮寺の記録等から見て、文親＝鉄牛上人の存在は間違いのないところでしょう。

そして、上記記した如く、鉄牛上人＝文親の母が土佐楠氏（正儀の末裔、楠瀬氏）の娘、要は、鉄牛上人が楠氏の末裔である、との伝承を裏付ける歴史的背景は十分にあるといえるのではないのでしょうか。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）

●長宗我部元親・楠氏関係地図

「楠氏雑録（二）楠瀬儀孝 <楠瀬八生氏提供資料：系図による>

元親	1539 ~ 1599
初陣	1560
土佐統一	1575
四国統一	1585
正秀系	
正盛	正儀 3代 1466 吾川郡
正宣	正儀 5代 1527
正輝	正儀 7代
藤太郎	正儀 17代 1948
正祥	正儀 7代 1575
正清	正儀 12代
正平系	
正直	正儀 3代 1468
正康	正儀 4代

